シリーズ回想
軍楽隊能力構築支援 97

1 序

令和4年11月、自衛隊音楽まつりが3年ぶりに開催された。陸・海・空自衛隊の各音楽隊に加え、在日米陸軍、海兵隊軍楽隊、パキスタン陸軍軍楽隊が参加し、コロナ禍にもかかわらず盛大かつ感動的な音楽まつりとなった。そして聴衆を最も惹きつけ大きな感動を届けてくれたのが、創設から7年間、一貫して中央音楽隊（以下、中音）が育成支援を続けてきたパプアニューギニア国防軍軍楽隊であった。本稿ではこれまでの支援を振り返り、中音と同軍楽隊の歩みを紹介させていただく。

2 PNGって!?

平成26年、陸幕から突然「陸上幕僚長がパプアニューギニアの国防軍司令官との会談で軍楽隊の育成支援を打診されましたが、中音の支援は可能ですか?」と質問を受けた。当時は能力構築支援と聞いてもよくわからず、どこかの部隊が行っている国際協力という程度の認識であったため全く想定外、斜め上からの打診であった。ただわれわれが日々追求している音楽分野で国際貢献できるということは平素に魅力であったため「ぜひ前向きに検討させてください」と返答した。その後送られてきた関連資料には「PNG」の文字が踊る。PNG?：パプア（P）・ニューギニア（G）!?

その日からPNGとの濃密な日々が始まった。

3 ゼロからの始まり

当時PNG国防軍には軍楽隊が存在せず、楽器も楽譜も練習場所も何もない状態であった。まさにゼロから軍楽隊を生み出す壮大な支援で、どのくらいの期間で創設できるかは雲をつかむような事業であった。PNGの要望は3年半後の平成30年、同国で初めて開催されるアジア太平洋経済協力首脳会議（APEC2018）での演奏を目指したいとのこと。

支援をイメージする際にまず思い浮かんだのは150年前の日本。明治維新に陸・海軍の軍楽隊を創設したことであった。当時の日本には西洋音楽文化がなかったため、いわゆる「御雇い外国人」として陸軍はフランス、海軍はイギリスの軍楽隊長を招へいし、全く素養のない人に音楽を教え始めた。記録によると明治2年に海軍軍楽隊の母体となる薩摩藩軍楽隊が修習を始め、4年後の明治6年には天皇陛下の御前で演奏をしている。PNGの場合、平成27年から教育を開始できてAPECまで3年しかなく、しかも現時点ではゼロの状態。現実的に実行可能なのか悩んだが、陸上自衛隊は創隊以来の大改革を推進する最中、音楽科職種も恐れず挑戦してみようと隊長以下、覚悟を決め、3カ年の支援計画を立てた。

乗り越えないといけない課題は山積みであった。教育はPNG国防軍が選定した2人の基幹要員を日本に招へいして指導することから始まった。楽器は外務省ODAで供与することを念頭に調整が進められた。平成29年、軍に対する初めてのODAとして楽器一式が供与された。またODAに先立ち、平成28年には宮城県の仙台育英高校から吹奏楽部の中古楽器を寄贈いただき、日本・パプアニューギニア音楽がつなぐ平和の道～

陸上自衛隊 中央音楽隊 副隊長 2等陸佐 柴田 昌宜（前編）

国民性や風習の違いを超えた教育は、先の見えない果てしないものに感じられた。

APECまで残された期間は2年を切っていたため、多人数の招へいを組み合わせ、現地にはJICA専門家として採用された自衛隊音楽隊OBが常駐するなど、国を挙げた態勢で支援を行った。

平成30年を迎え、PNG国内でもAPECへの準備が加速してきた。開催は11月となったが、長以下、覚悟を決め、3カ年の支援計画を立てた。

乗り越えないといけない課題は山積みであった。教育はPNG国防軍が選定した2人の基幹要員を日本に招へいして指導することから始まった。楽器は外務省ODAで供与することを念頭に調整が進められた。平成29年、軍に対する初めてのODAとして楽器一式が供与された。またODAに先立ち、平成28年には宮城県の仙台育英高校から吹奏楽部の中古楽器を寄贈いただき、日本・パプアニューギニア音楽文化交流協会によってPNGまで輸送され、軍楽隊の育成に大きな進展をもたらしたことを感謝の念を込め紹介させていただく。

4 APEC2018に向けて

PNGは赤道近くにあるオセアニア地域の常夏の国で、国土は日本の約1・25倍、人口は約895万人。国土の大半が未開発の山地や密林で、そこに世界最多800以上の民族と言語が存在している。第二次世界大戦ではラバウルやウエワクなど各地に15万人もの日本軍が動員され、米豪をはじめとする連合国との戦いで約12万8千人もの将兵が散華され、いまだ多くの遺骨が眠る地である。筆者の大叔父は東部ニューギニア戦線に将の素養は「歌がうまい」「ギタ校として派遣され、高射砲の大隊に所属し数百kmに及ぶ行軍と飢餓、マラリアに罹ってラバウルに後送され終戦を迎えている。大叔父は現在101歳で健在だが、632人が所属した大隊で生還できたのはわずか60人、それほどニューギニアは凄惨な戦地であったという。私は平成27年に初めて現地へ赴き、遠くオーエンスタンレー山脈を見晴らしたとき、激戦地ポートモレスビー作戦の舞台となったその山並みに青春時代の大叔父の姿が重なり、私が自衛官としてPNGのために貢献できる事跡を思うと、胸にグッと熱いものが込み上げてきた。

PNG国防軍は陸海空で約3600人と小規模で、その主力でもAPECへの貢献できた。開催は11月のAPECのどこで演奏するかが決まらず、議論は煮詰まらなかった。軍楽隊の教育成果が表れてきたのは、とてつもない苦労があったことは想像に難くありません。それだけに、大きな結節といえる日でした。

この時、まさか、この4日後に宮古島で陸上自衛隊史上最悪といえるUH－60JAヘリの事故が起きるとは誰一人として想像していなかったでしょう。私もそのことについて書いていることが本当に辛いです。

自衛官にとって、またいずれの軍においても、ヘリというものは単なる輸送手段にとどまらず、戦場においてその存在はまさに「救世主」にほかなりません。ベトナム戦争以降、ヘリの運用が本格化した米軍では、せることともお願いしたいと思います。

こんな時、つい自分たちの訓練を実施するなど侃みをきかせています。このような緊迫した情勢において視察に飛び立ったヘリが消息を絶ったのであり、わが国最初の犠牲者と言えるのではないでしょうか。

一方、今現在は事故の被害者でもある陸自は、これから10人もの尊い人命に対する責任とも向き合う当事者にもなります。「いつ事故が起きてもおかしくなかった」と見なされる事象がなかったのかどうかを検証しなくてはならないでしょう。

安全に100％はない中で、せめて今後こうした飛行時には予備機の随行を必須にできないものでしょうか。人員も可動機数も厳しい状況で「余計なことを言うな」と怒られそうですが、せめてもの思いです。

こととなった。とはいえPNG軍の家族向けのミニコンサートを開けるようになっていた。

APECでの演奏は、各国首脳が参加する大晩餐会での歓迎演奏となった。会場はAPECのために新築されたホテルの中庭で、各国のVIPに演奏を届けられる絶好のロケーション。晩餐会が始まる前から連続して演奏するという過酷な内容であったが、ようやく披露できる場を得たことから、軍楽隊がその時点で演奏できる曲目をかき集め、10曲弱を何度も繰り返して演奏することとした。

当日は17時頃から演奏を開始した。屋外のため天候を心配していたが幸い好天に恵まれた。各国首脳が続々と来場する中、日本から参加していた安倍総理大臣（当時）ご夫妻が会場に到着された。総理は当地軍楽隊の育成を陸上自衛隊が担っていることをご存知で、軍楽隊の姿を目にされると立ち止まって演奏をお聴きくださった。

軍楽隊はこの日のために練習した日本の唱歌「ふるさと」を演奏し、演奏が終わると総理から激励のお言葉をかけていただいた。2時間に及ぶ初めてのミッションを完遂し、軍楽隊員は元より、この日のために長い時間をかけて支援してきた私たち中音一同も、大きな高揚感と達成感で満たされていた。

（後編に続く）

「筆者紹介」

柴田 昌宜（まさのり）

兵庫県出身　大阪音楽大学卒
平成15年入隊・幹部候補生学校

主要部隊歴
平成19年　第1混成団音楽隊長
平成22年　第15音楽隊長
平成23年　中央音楽隊
平成27年　陸幕総務課広報室
平成29年　中部方面音楽隊長
令和4年　中央音楽隊～現職

故郷の加古川観光大使も務めている。

遠捕術訓練の様子

「自衛隊の学校・今昔物語」㉓

陸上自衛隊・小平学校

1．小平学校とは

小平学校は、平成13年3月27日に創設された自衛隊の任務遂行の基礎となる警務・会計・人事・法務・システム等の実務全般にわたる幅広い教育を担任する陸上自衛隊唯一の教育訓練機関であり、海・空自衛隊、補佐する師・旅団法務官要員、幹部学校本校は臺事務官・技官も含めた自衛隊員にとっての「実学の府」です。陸上自衛隊の数ある学校の中で、職種の名称ではなく所在地域の名称がつけられているのは臺士学校と小平学校だけです。

小平学校は、警務・会計の二個職種部、人事・法務・システムの三個教育部が次の教育・研究に取り組んでいます。

○警務科部は、警務科職種の幹部・陸曹の基本教育、特に部内の規律維持を司る司法警察職務に従事する警務官を育成する陸・海・空自衛隊唯一の教育機関として、警務官としての必要とされる資格・知識・技能、警務科隊員としての戦闘戦技教育および警務科職種として必要な研究を行っています。

○会計科部は、会計科職種の幹部・陸曹の基本教育、特に会計科部隊等の任務遂行に必要な予算、給与・旅費の支払い、資金の受領・保管、歳入・歳出の決算および計算証明、債権の管理、契約業務、原価計算等に関する教育を幹部・陸曹・陸士・事務官等に行っています。また、会計科隊員としての戦闘戦技教育および会計科職種として必要な研究を行っています。

○人事教育部は、幹部・陸曹・事務官等に対して部隊等で必要とされる人事（補任）、渉外広報（募集・援護・広報）、厚生に関する教育や1等陸佐の定年千定者に対する再就職に必要な研修および研究を行っています。

○システム教育部は、日米共同方面隊指揮所演習においてコンピュータシミュレーションを使用して状況を付与するレーション技術操作、統計的手法やオペレーションズリサーチを運用する運用解析、ネットワークシステムの使用法やソフトウエアの改善提案等のシステム操作について行っています。

2．小平駐屯地の地理・歴史

駐屯地のある小平市は、都心から西に約26kmの距離に位置し、東西10km、南北4kmと東西に長く、面積は約20㎢です。人口約18万人を擁し、玉川上水の両岸には緑が多く残され、武蔵野の面影を今に残していま

現在の小平駐屯地正門

す。小平駐屯地は市の南側に位置し、関東管区警察学校、国土交通大学校などと隣接しています。

小平に旧陸軍経理学校が牛込区河田町（現在新宿区にある東京女子医大）から移ってきたのは昭和17年3月で、今年で81年になります。経理学校ができる前は、大根、芋、桑などの畑でした。当時は、物資不足が顕著に表れており建物は全て木造でした。

終戦に伴い昭和20年9月に旧陸軍経理学校は解散し、米軍に接収されました。その後は昭和29年3月旧陸上自衛隊に返還され、日本国政府に返還された一部に保安隊小平駐屯地が創設され、幹部学校が久里浜から移駐しました。昭和29年9月に調査学校が独立して創設、昭和34年12月に駐屯地業務隊、第412会計隊が創設され、業務学校、幹部学校が統合し小平学校となりました。

平成30年小平学校は改編され、情報学校が新たに創設され、情報学校本校は臺士地区に、情報学校第2教育部は小平に残り現在に至ります。

土魂の碑

4．小平学校長が語る 小平学校の将来像と教育について

小平学校は現編制となってから4年が過ぎ、これまでの伝統を継承しつつ、近年の安全保障環境を踏まえた新たな教訓・訓練評価の在り方を検討し少しずつ進化を続けています。

ウクライナに対するロシアの軍事侵攻においても行われている法律戦、広報による情報戦として注目されているように、ロシアの軍事侵攻に対し警務・法務・広報機能が統合した指揮幕僚活動が求められ、システムを活用した指揮準備前から事態終結まで人員・物資を確保・維持するために会計・人事の機能が重視されています。

平素から有事に至るまで切れ目なく、柔軟かつ持続的な教育がますます重要になってきています。小平学校はこれらの機能が平時から有事に至るまで十分に発揮できるよう、練度の向上を目指して参ります。

小平学校では、国の安危を担任する者としての「使命感」を基礎として、根拠法令を厳正確実に順守し、公正な判断、正確かつ確実な業務遂行を求める「堅確」と支援する相手の任務完遂を第一義とし、保有する知識と業務遂行能力を駆使して解決策を創造する「貢献心」を養うべき共通の資質として、国民のために自衛隊で活躍できる隊員を育成しています。入校した学生が部隊で飛躍できるよう学生教育に取り組んで参ります。

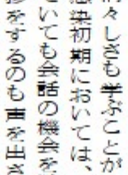
3．小平学校の歴史

小平学校の前身は、久里浜に創設された総隊学校第5部が業務学校として独立したことに始まります。昭和29年9月には業務学校から調査学校（小平）、幌呂学校（松戸）、輸送学校（立川（現在の東立川））が独立しました。平成13年3月に業務学校、調査学校、駐屯地業務隊、第412会計隊

きずな

新型コロナウイルス感染症の収束

運営委員　森山 尚直



「3密」「黙食」「オミクロン」。毎年、流行語として取り上げられた新型コロナウイルス感染症がようやく収束しました。今月8日から「2類相当」の新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが、入院勧告などが必要ない「5類」（季節性インフルエンザなど）に引き下げられ、新型コロナ前の日常が戻りました。

国内で初の感染者が発生した令和2年1月から約3年半。この間、ダイヤモンド・プリンセス号への対応、緊急事態宣言の発出、東京五輪・パラリンピックの延期、翌年の無観客での開催、自衛隊によるワクチン大規模接種会場の運営などパンデミックとの戦いが続きました。

幸いにも私自身は罹患していませんが、同居の家族が罹患し、濃厚接触者として、自宅外での活動ができない期間も経験しました。しかしながら、このコロナ禍で、私自身は、多くのことを学ぶ機会となりました。

先ずは、専門家によるマスコミでの発言です。ある程度、感染状況が把握でき「正しい知識で正しく恐れる」との見解が出るまでの間、その間、そのデマ情報などが溢れ、何が真実かは、分からない状況が続くのではないかと思います。このような時には、政府による情報発信を信じ「分からないことは、分からない」と一喜一憂しないことが求められるのではないでしょうか。

次に日々の生活で感じたことです。新型コロナ禍では、在宅勤務が主体となったことから、運動不足解消のため、夕方の時間に歩くことを心掛けました。この際、歩道を走る自転車の多さに気付きましたが、道を譲ると会釈をされる方々、逆に道を譲ってくれる方々に、譲り合いの生活の清々しさも学ぶことができました。

感染初期においては、マスクを着けていても会話の機会を減らすため、挨拶をするのも声を出さず、黙礼だけが多くなっていました。また、ゴミが落ちていてもそれを拾うのを躊躇し、特に落ちている不織布マスクを拾うのは避けていました。

脱新型コロナウイルスの日々においては、この間に、できなかったこと、改めて学んだことを大切にして、実り多き3年半であったと振り返れるようにしたいと思っています。

美佐の新国防論 146

あまりに大きい試練　UH－60JA事故

「感慨深い日でした」とメッセージを陸上自衛隊関係者からいただいたのは4月最初の週末でした。沖縄県の石垣島に新たな駐屯地が誕生し、4月2日（日）に開設記念式典が行われたのです。

近年、南西諸島への自衛隊配備が進められていて、2016年に与那国島、19年に宮古島に沿岸監視やミサイル部隊と続き、一連の計画が石垣島でもまずは結実したことになります。そのプロセスにおいては、とてつもない苦労があったことは想像に難くありません。それだけに、大きな結節といえる日でした。

この時、まさか、この4日後に宮古島で陸上自衛隊史上最悪といえるUH－60JAヘリの事故が起きるとは誰一人として想像していなかったでしょう。私もそのことについて書いていることが本当に辛いです。

自衛官にとって、またいずれの軍においても、ヘリというものは単なる輸送手段にとどまらず、戦場においてその存在はまさに「救世主」にほかなりません。ベトナム戦争以降、ヘリの運用が本格化した米軍では、ヘリが救出に向えないエリアでは行動しないことが前提条件になったとも聞きます。ヘリは命綱であり、あのローター音が地上で孤立する兵士をいかに勇気づけてきたか計り知れません。

そのヘリが現時点で原因がまるで想像できない事故というのはあまりにショックが大きく、また、大切な家族が自衛隊に属する自衛隊家族会にとっても大きな衝撃だと思います。

防衛省では3月30日に大きな人事があり、統幕長や陸幕長、空幕長などトップが新並み交代しました。石垣島での式典がその直後だったため、おそらく多くの方々は引っ越し作業などを翌週末に残していたに違いありません。捜索は大型連休も挟み長期に及ぶことが予想され、人事異動と体制一新から途端にこのような状況に入り、関係者の心身の消耗も案じられます。

こうした時はなかなか休めないという状態になりがちで、東日本大震災の際も現地で活動する隊員を慮るばかりに司令部や遠く離れた東京で勤務する人たちがとても休息など取れないという空気になっていました。そのことを一番気にしているのは亡くなった坂本師団長たちかもしれません。声をかけ合い、心身を解放さ

（軍事ジャーナリスト）

桜林 美佐（さくらばやし みさ）

東京生まれ。日本大学芸術学部卒。ディレクターなどとしてテレビ番組制作に携わった後、防衛問題研究家に。

著書に「奇跡の船『宗谷』」「海をひらく 知られざる掃海部隊」「誰も語らなかった防衛産業」（並木書房）、「終わらないラブレター祖父母たちが語る『もうひとつの戦争体験』」（PHP研究所）、「日本に自衛隊がいてよかった―自衛隊の東日本大震災」（産経新聞出版）、「ありがとう金剛丸―星になった小さな自衛隊員」（ワニブックス）、「武器輸出だけでは防衛産業は守れない」「自衛隊と防衛産業」「自衛官が語る 災害派遣の記録（監修）」「自衛官が語る 海外活動の記録（監修）」（並木書房）など多数。